

採卵鶏育成場で発生した伝染性気管支炎

新潟県中越家畜保健衛生所

○市川雄紀、市村有理、濱崎尚樹ほか

採卵用育成鶏約 23,000 羽を 6 鶏舎で飼養する農場において、平成 27 年 12 月 6 日、20 日齢の鶏群 1 鶏舎 4,188 羽の死亡羽数が 10 羽/日に増加、12 月 9 日の立ち入り検査までに 3 日間累計 66 羽が死亡。一部の鶏に沈うつ、開口呼吸、下痢の症状。死亡鶏 3 羽で気管スワブを用いた鳥インフルエンザ簡易検査を行い、陰性を確認後、死亡鶏 6 羽について病性鑑定を実施。全羽に著しい消瘦、腎臓の腫大及び退色の所見。主要臓器から有意な細菌は分離されず。腎臓のブール乳剤を材料とした RT-PCR で伝染性気管支炎ウイルス (IBV) 特異遺伝子を検出し、また IBV も分離したことから伝染性気管支炎と診断。死亡羽数は発生の 9 日後に通常羽数になり、8 日間の累計死亡羽数は 122 羽 (発生鶏舎内死亡率 2.9%)。本症例は腎炎型の IB と推察され、分離株の S1 遺伝子は JP-I 型、S2 遺伝子は Y-4 型と判明。発生農場では、生ワクチンを 1 日齢 (C78) 及び 14 日齢 (S95) で接種。本分離株は S95 と近縁であり、20 日齢で発症したことから、ワクチンテイク前の感染が疑われた。本鶏群において、10 日齢までに餌付け不良及び下痢により死亡または淘汰した個体が存在し、鶏群の状態が不良であったことから、ワクチンテイク不良の原因となった可能性があるかと推察された。